

【コンペティションⅡ 新人振付家部門 総評】

今回も個性豊かで魅力的な10人の振付家たちと出逢うことが出来た。

鈴木梨音・おかだゆみ・大西優里亜の作品からは、観客の視線を繊細にコントロールしている印象を受けた。より強度のある作品に変化する可能性を強く感じた。渡辺明日香・鹿島梨恵奈・小笠原美優・浦島優奈たちは、振付家としてダンサーの個性を引き出す能力を備えている。それぞれの個性を全面に出すか、作品全体のバランスを取るか、4人とも異なるアプローチで見応えがあった。仙石孝太郎・平田栞は身体能力の高さと、身体中から溢れ出る「踊ること」への欲求が観客を魅了した。高橋春香は高い構成力を持ち、舞台上の生身の身体を「作品」へと上手く昇華していた。

審査員をする上で、「作る」機会だけでなく「観てもらおう」機会を増やしていくことが、私のように環境整備をする側の責任だと改めて強く感じた。観てもらおうことで作品も振付家も進化し続けるだろう。残念ながら賞を逃した人たちは悔しい気持ちを抱えていると思う。それをバネに大きく飛躍できる可能性を秘めていることに自信を持って、創作を続けて欲しいと心から願っている。

加藤弓奈（急な坂スタジオ ディレクター）

12年前に横浜ダンスコレクションに出場した経験者であり、出演者の気持ちが一番近い審査員として総評させていただきます。今回はとてもいい意味で得点の差がありませんでした。皆さんよかったです。いたらない作品というのがありませんでしたので審査はとても難航しました。突出した作品がなかったとも取れますが、独創性はこれから伸ばして行く部分なので期待しています。仙石さん、平田さん、鈴木さんは、ダンサーとしての身体のクオリティーが高く、その身体性を今後もより向上してほしいです。浦島さんと鹿島さんのグループは、フォーメーションやコンタクトのレベルが非常に高く、作品として完成されていました。高橋さんとおかださんは独特な世界観が面白く、これからもその独創性を伸ばしていただきたい。渡辺さん、小笠原さん、大西さんは、音楽の繊細な使い方、粋の小道具や音の出る衣装や紙の素材の利用など、身体のコントロール以外の部分を作品に取り入れており、総合芸術としての舞台の可能性を強く感じました。全体として感じるのは、コンテンポラリーダンスだから世界観を演出しなければと考えるのは当然ですが、やはりまずはダンス（身体）が重要なのだと言う事を第一に押し出してくれる若者が増えるとよいと感じます。踊れなくても、あるいは踊らなくても作品になるという概念の改革が必要だと感じました。

スズキ拓朗（CHAIROIPLIN 主宰、ダンサー・振付家・演出家）

主題もスタイルもヴァリエティに富んだ作品が並び、審査はいつも以上に難しかった。そのなかで最優秀新人賞を手にした高橋春香『EAT』は、幼年期の記憶を扱う彼女の手さばきに、自分を冷たく突き放す批評性を強く感じさせた。構成の巧みさとともに、千変万化する口元の表情の不気味さが忘れられない。浦島優奈『My habit』は、動きのユニークさと優れた構成力が光り、今後の創作に大きな期待がかかる。おかだゆみ『有酸素運動』もコンセプトな作りが魅力だったが、自らが紡ぐ言葉と身体との距離が近すぎたかもしれない。優れた踊り手であるのに敢えて今回自らの踊りらしい踊りを禁じた仙石孝太郎、ダンスで熱く自分を出し切った平田栞、2人ともベストダンサー賞にふさわしいパフォーマンスだった。

応募者の世代が入れ替わり、コンテンポラリーダンスに新たな風が吹きはじめてきた印象が強い。次回も、観る者に驚きを与えてくれるコリオグラファーの登場に期待したい。

浜野文雄（新書館「ダンスマガジン」編集委員）